元部下の距離感がバグってるんだが最近更に近くなった気がする

さわ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

恋愛した事ない大人っぽいけど全然大人じゃないパツキンを書きたかった。

目　次

距離感可笑しくない？って言ってみた　1
相談してみた　12
上司と会ってみた　22

距離感可笑しくない？って言ってみた

俺は今猛烈に後悔している。

小さい頃に将来について考えた事はあるだろうか？

殆どが朧気にこうなればいいなと思ってたぐらいで明確なビジョンがあった訳出ないと思う。

かく言う俺もそうで明確な目標や指標がある訳もなく、適当に仲間内で楽しくやって過ごしていたら気が付いたらもう就職だ。

その時俺はある就職先を特に考えず選んだ訳だ。もう殆ど想像出来ただろう。

大多数の人間がそこに就職すると言っても過言ではない大手も大手、そんな所に就職した当時はこれで安泰だなとしか思ってなかったのだが。

「この書類提出期限明日までだろ……　うわっこっちとか別部署に確認とらなきゃなんねぇし……」

時刻は２３時。

今日も今日とて残業だ。

昔はこんな残業まみれで仕事ばっかの生活になるなんて想像も出来なかった。あの

頃の俺よ、どうして何にも考えず管理局に入っちまったのか。いやでもまさかここまで仕事に追われるだなんて思わないだろう。

書類は溜まるわ、現場には駆り出されるわで過労死待ったナシである。

なんなら執務官は独自の裁量権があるせいで、割と高めの魔導師ランクが求められる。その高いランクのせいで現場に出れば「じゃ、此処は君に任せるね」とでも言いたいのか俺以外に局員は数名。

馬鹿じゃねぇの?迷子の猫見付けるのとは訳が違うんだよ?災害だったり化け物だったり、犯罪者だったり。時には他惑星にだって行く事がある。

うん、馬鹿なのかな?

ぜってー過労死するよ?いいの?死んじゃうよ?

マーク　フルーラン２９歳ほぼ三十路。独身彼女なし。

管理局執務官。いわゆる社畜である。

昔から魔力は人並みにあった。
何事も満遍なくこなせたし成績も常にほぼ上位、空戦の資格も無難に取れた。
それがいけなかったのか何でか今や執務官としてお役所勤めである。それはいいのだが流石にこの仕事量は聞いてない。
流石に耐えかねて直属の上司に文句を言うと、すっげぇ申し訳なさそうな顔で謝られた。万年管理局は人手不足で特に近年大きな事件もあり、その影響で離職者が多く発生し独自の裁量を持つ執務官にそのシワ寄せが来るのは必然で。
「未来のため、ひいては管理世界の人々の為に」とか言われてしまえば断る事なんて出来ない。
あんな偉い人も頭を下げるんだなと人並み以下の感想と、こんな真摯に世界を想う上司に文句を言えるはずも無く。

「世界はいつだってこんなはずじゃない事ばっかだよ、ホントにな」
時刻は既に日を跨いだ頃、やっと目処が経って帰宅途中。
まだくっそ明るい管理局に今日もデスマーチしてる人いるんだろうなご愁傷さまですと心でおじぎをして帰宅する。ああも言ったが執務官はまだマシな部類である、独自の裁量を持つ為確かに様々な分野の仕事が回ってくるがどれも期限に間に合えば定時

帰宅していいし。まぁ間に合えばだけど。
飛べれば一瞬で帰れるのに、と思いつつ此処は飛行制限エリアなので勤務時間でない俺が飛んだら即逮捕なので徒歩で帰る。
さて、今日もコンビニ弁当だなぁと何食べようかなと今日買う弁当に思考をめぐらせていると。
「あっ、マーク執務官。お疲れ様です」
「おう。フェイトも帰り?」
ばったりと同僚とエンカウント。
こんな三十路手前のおっさんにも曇り一つない笑顔で挨拶してくる彼女。若く局内でも美人だと言える彼女。いやほんとおっさんにはその笑顔の直視は厳しいよ。
そんな彼女も同じ執務官で色々な縁があり、一時期面倒を見た事もあり本人の社交性も伴ってこうして挨拶する程度の仲ではある。
「そうですね、今日は早めに帰れました!」
いやもう日付回ってるよ?早めって一体?
「そういえばこの前の案件の時は助かりました!」
「あー。あれね、別に大した事ないよ。ただでさえ人手足りてないんだから借りれる所で借りないとな」

「でもマークさんも忙しかっただろうに……　もし私に助けられる事が遠慮なく言ってくださいね！」
「まぁ考えとくよ」
今どきそんな善意１００％の笑顔でそんな事言って来るやついんのかと思うのだが、これは間違いなく１００％だと言える。なんでこんな子が管理局に、ほんと世も末だな。
横でニコニコ笑顔を向けて来る彼女に気後れしつつも無難な返しをする。そりゃ泣き付けるなら泣き付きたいが、流石に１０も離れた女性に泣き付く程プライドを捨てた訳では無い。
「あっ！そうだ、良かったら一緒にご飯食べて行きませんか？」
間違いないように言っておくが彼女これで本当にただ一緒にご飯を食べたいだけだと思う。
彼女の面倒を上司に頼まれて、あの時から幾分か一緒に過ごして分かったことがある。
この子はドが付く天然であると。仕事が仕事なので遠くに出張する事もあるのだが、その時にホテルの部屋を平然と一緒にしようとしてくるあたり正気を疑ったが彼女は大真面目で「どうしたんですか？」と不思議そうに首を傾げていた。

そんな事もあって彼女の提案に下心なんてミリも存在していなくて、ただ単純にそっちの方が楽しいとか嬉しいとかそんな可愛らしい理由だろう。

ほんと何でこんな子が管理局に……

「いやもう遅いし止めとくよ。体裁的にこんな時間に女性の家に行くのはあまり良くないからね」

「どうしてですか?」

おい、誰かこの子に教えてやってくれよ。

ずっこけそうになった。こてん、と首を傾げる彼女は大変可愛らしいが付いてったら最後誰かに見られたら局内で噂になるだろうに。

ミッドチルダは職場恋愛に寛容的で寧ろ推奨までしてくる、何なら上からお見合い話が仕事として降りてくるぐらいには。

流石に強制でないし、女性側には配慮もあるらしいがそれでもやりすぎ感はある。要はいっぱい子供産んで将来有望な子を是非管理局に!という思惑が透けて見える。

まあミッドチルダでの大多数が管理局に就職しているのは事実ではある。

「むぅ、何でそんないじわるなんですか?」

「いやそんな膨れっ面してもダメだからね?」

「最近は全然誘ってもつれない態度ですよね。私はこんなにも一緒に居たいのに」

「いや言い方気を付けようね？」

確かに前は割と出来るだけ要望には答えていた。でも流石に頻度がおかしかったし、何より彼女はこう見えて俺なんかよりも有名人で最近あった大きな事件を解決した時の人でもあるのだ。

ただでさえ若くレアな変換持ち、更に執務官で英雄ときた。そんな有名人になった彼女と高頻度で一緒にいてみろ。週刊誌に切り抜かれるぞ。

「でも付き合い悪くなりましたよねっ！」

「いや今までがちょっと一緒に居すぎたんだよ。部下だった頃ならまだしも今はそうじゃないし流石にな」

「でもこうやってたまたま会ったり、機会があれば知り合いだったら普通に誘わないですか？だって一緒の方が絶対楽しいですよ！」

普通は毎回誘わないから。そもそもこんな時間に誘うとかもう大分あれだから。

この際身内のお兄ちゃん感覚が抜けない彼女にははっきりと言った方が良いかもしれない。

「あのな、この時間に一緒にいる男女ってさ９割カップルなんだよ」

「……　ふぇ!?」

「１００歩譲って本当にばったり出会したり、一緒に帰ることがあってもその後一緒に

いるのは流石に周りから見たら男女の関係に見える訳よ。実際俺たちがどうであったとしても周りからはそう見えるんだ。フェイトも嫌だろこんなおっさんとそういう風に見られるのは」
「そ、そうだったんだ」
夜道でも分かるぐらいには顔が真っ赤になった彼女は言葉も尻すぼみになっていき視線も俯き加減に。
あぁ、良かった。そこは普通に恥ずかしがるぐらいには理解出来たらしい。
「そういう事だからむやみやたらに誘ったりしたら駄目だぞ」
「は、はい」
それ以降彼女は終始照れたままで、結局別れる最後まで借りてきた猫のようであった。

「た、ただいま」
「お帰りなさい、フェイトちゃん」

「なのはも帰ってたんだ……」
「うん、たまたま今日はね。……　あれ？フェイトちゃん顔赤くない？どうしたの？」
　マークさんと別れた後、気が付いたら家に居た。
　まさか私たちがか、カップルと思われてるなんて思わなくて顔が熱くなり自分でも真っ赤になってるだろうなって分かるぐらい。
「ねぇ、なのは」
「ん？どうしたの？」
「マークさんと私って……」
「あー……」
　カップルに見えるのかな？そう聞こうとすると露骨になのはの顔が苦笑いに。
「もう結構前から噂になってるよ？フェイトちゃん、アヒルみたいにずっと後ろを付いて回ってたし場所も選ばず直ぐに声掛けてたし」
「も、もうっ！なのは気が付いてたら言ってよ！私どんな顔して管理局に行けば良いのっ!?」
「言ったよ？私もはやてちゃんも。でもフェイトちゃん、直ぐマークさんの話をしてきて聞いてくれなかったんだもん」
「うぅ……」

は、恥ずかしい……

マークさんは私が執務官になった時、研修として補佐をした際の上司にあたる。マークさんは凄い、少し何時も気だるげでやる気無さげではいるけれど誰よりも熱心なんだ。

彼が来ただけで現場の皆は安心していたし、現場に居合わせて怖い思いをした子供にも優しかった。

彼の背中は妙に安心感があって後ろにいるだけで心がぽかぽかするんだ。だから知らぬ間にその背中を追い掛けていたんだと思う。

「ど、どうしようなのはぁ～」

「うーん。手遅れだと思うけどなぁ。あれだけずっとベッタリしてたら、ね?」

「そ、そんなにベッタリしてたかな?」

「もう物凄くしてたよー。でもカップルっていうよりも兄弟って感じだったけど」

「そうなんだ……」

今更距離をとる?今まで普通にしてたのにいきなり距離取ったりしたら嫌われたりしないかな?

でも同じようにしてたらカップルだって思われちゃうし、マークにも迷惑掛けちゃう。

そんなふうに私が悩んでいると

「フェイトちゃんが考えてる事は何となく分かるけど、無理に変える必要は無いんじゃないかな？」

「ど、どうして？マークさんも私のカップルって思われて迷惑かもしれないし……」

「うーん、それは無いと思うけど……　ひとまずフェイトちゃんはどうしたいかだと思うんだよね」

「私がどうしたいか……」

相談してみた

執務官は現場に行く事があるが、逆に行く仕事が無ければ行かないし何なら与えられた部屋から出る事はない。

しかし仕事があれば外には行く。今日は本部に用事があるので来ているのだが。

「何かやたらと注目を浴びてる気がするが……」

久しぶりに来た管理局本部。

周りから良く見られている気がするのは気の所為だろうか？特に何かミスをした訳でも、大きな仕事を終わらせたりとか誰かしらに噂される様な事は無かったと思うのだが。

まぁ気にしても仕方がない。さっさと用事を済まして帰ってしまいたい。

「ま、マークさんっ！」

「ん？フェイト、どうしたんだ？」

声を掛けられ足を止める。

執務官なんてやってると同じ執務官と出会う事なんて滅多にないのだが、フェイトと

は最近よく会う気がする。そして何だかフェイトの様子が最近おかしいのだ。
「あの、えっと……」
「……　また一緒にご飯でも食べる?」
「あ、はいっ!宜しくお願いしますっ!」
俯き加減にチラチラと上目遣いで言い淀むフェイト。まるで照れているように見えるがまさか……　ね。此方から食事に誘うとパァと向日葵が花開いたかのように笑顔になる。
余りにも清々しい程に気持ちの良い笑顔に俺もつられて笑顔になるな。
本当に良く会うのもそうだが、何時もみたいな無邪気さが全くないとは言わないが妙にしおらしくなったように思える。
「んじゃ、俺は行くね」
「あ……　えっと、待ってくださいっ!?」
そろそろ行こうかと声を掛け歩き始めると袖を捕まれ強制的に足を止められる。
何事かと振り返ると目をぐるぐる回してあたふたしているフェイトが。どうも引き止めるつもりはなかったのか何やら焦っている様子。
「これは……　その、えーっと……　も、もう少し何か話しませんかっ!」
「あー……」

別に俺も今すぐ仕事を終わらせなければいけない訳じゃない。今も上司に顔見せに行こうとしてたぐらいで予定と言えば午後からになる。食事の約束にしても今から食べに行くにはちょっと早すぎるぐらいの絶妙な時間帯でもある。

そういう意味では全然余裕はあるし、話ぐらいなら全然構わないのだが。

「俺も吝かじゃないんだけどね、前も言ったと思うけどこうも一緒にいると噂になっちゃうぞ？」

そう言うと更に顔を真っ赤にするフェイト。だが俺の袖を掴んだ手は力強くなった気がした。

「別に……　構わない、です」

「え、えぇ……」

構わないんかい。

でも君今も爆発してしまうんじゃないかってぐらい真っ赤だし明らかに無理してないか？

それに俺だって枯れてるとは言え男だ、フェイトのような美しく若い女性と一緒にいるのは癒し、もとい男としての腐り切った自尊心も満たされるのでいい事ばかりなのだが。

それでも周りからのやっかみや、それにあの上司が黙っているとは思えない。だって

あの人くっそシスコンだもんな。
俺にフェイトを預ける時も「間違えても妹には手を出すなよ？」って額に青筋走ってたもん。
ハラオウンはシスコンだってそれ管理局ではずっと言われてるから。

……　あれ？もしかしてフェイトがこうして変な男に引っ掛かってないのって兄のお陰だけど、こんなにも俺に無防備なのでその兄のせいなのでは？
とにかく俺はあくまで同僚としての距離感を保つのが適切で、それ以上は命にも関わる。
「あのなフェイト。お前は自分が思ってる以上に知名度があってな、それに必要以上に一緒にいると俺の命にも関わるんだ」
「え、えぇ！い、命に……　そ、そんなに私と一緒にいるの、嫌なんですか？」
うっ!?
そんな泣きそうな顔でみないでくれ。全部お前の兄に文句言ってくれ。どちらにしろこのまま泣かせると一緒に居ようがいまいが殺されてしまいそうだ。
はぁ、と内心で諦めの溜め息を吐きながらぽんぽんとフェイトの頭をあやす様に叩く。

「分かった、分かったから泣かないでくれ。別に嫌って訳じゃないし、フェイトみたいな美人と一緒にいるのはちょっと恥ずかしいだけなんだ。分かってくれ」
「う、うん。そっか……　美人……」
結局午後の仕事が始まるギリギリまで俺はフェイトと一緒にいた。
フェイトは終始上機嫌で何ならぽやぽやしていたが機嫌がなおったならそれでいい。にしても最近元部下の距離感が更にバグってるんだがどうしたらいい？

「最近元部下の距離感がおかしいんだが……　どうしてだと思う？」
「それ、私に聞くんですか？」
「お前以上に適任はいないだろ。今の所フェイトについて1番詳しいだろうし。教導隊に行くことになった時死んだと思ったけどな」
何だか明らかに冷めた、何やら冷たい目線を向けてくる彼女は高町なのは。フェイトとは親友であの前の大事件も共に同じ部隊に所属していた彼女ならばと話を振ったのだが何故俺は今こんなに呆れられているのだろうか。

午後からの仕事は教導隊への視察、もとい出向だった。人手不足が極まった管理局、教導の為に一定周期で局員を派遣して仮想敵を務めるのだがその役目が俺まで回ってきたという訳だ。

現場にはちょくちょく出ているが、それでも戦闘には自信が無い。正直目の前の彼女やフェイトには少なくとも勝てる気がしない。ランクSってなんぞ?

エースとは1人で戦況をひっくり返す事が可能な者に与えられる。その1人が彼女なのだと思うと改めて己との差を認識させられる。

なのはとは機動部隊六課ができる前、割と前に知り合っている。当時は現場の仕事がかなり多く犯罪数も馬鹿にならなかった。その時に色々あって現場を共にする機会が多くあって今の普通に喋る程度には関係を持てた訳だ。

じゃなければ俺がフェイトやなのはといった美人と関わりをモテるはずなんてない。

「親友って言っても私もフェイトちゃんの事何でもしてる訳じゃないですよ?」

「わーってるよ。でも忘れたとは言わせねぇぞ。フェイトが俺の所で研修してた時に後ろをついて回るフェイトに四苦八苦してた俺を見て爆笑してた事」

「いやぁ、あれは誰でも笑っちゃいますって。でも女の子に付け回されて嫌な気分ではなかったでしょ?」

そう言ってニヤニヤとした笑みを浮かべる彼女。

ほんとコイツ生意気な糞ガキだな。いつかぶっ飛ばしてやる。まぁ戦ったら普通に負けるけどね！

なのはとの関係性は今も昔も変わらない、昔っからコイツは堅物で一時期バカ真面目過ぎて墜ちそうになった時もそうだ。俺が居なかったら死んでもおかしくなかった。その時からずっと俺となのはの関係性はこうだった。

いや昔はもっと可愛かったと思う。いつからだこんなクソ生意気になったのは。

手間の掛かる妹と言えば良いように聞こえるかも知れないが、１０も歳が離れてればそんなもんである。

「そりゃ俺も男だから思わない事がないとは言わない。だが当時は本当にフェイトは天然オブザ天然でもうマジで困ってたのに指さして笑いやがって！」

「もう、昔の事じゃないですか。細かいこと気にしてたらモテませんよ?」

「うるせぇ。良いんだよモテなくても。どうせこの先ずっと管理局に囲われて仕事の資料に埋もれて誰にも見付けられず死んでいくんだ……」

「私が言うのもなんですけどちょっとぐらい仕事休んだ方がいいんじゃ……」

「１度でも休んでみろ、明日は２倍以上の資料の壁に押し潰されるぞ」

なんか珍しくすげぇ心配そうにしてるなのは。いやマジで環境が終わってるだろ、さっさと人手不足と仕事量の改善しないと色々と終わるぞ管理局。

　でも不思議と過労死した者はまだ居ない、ほんと不思議なんだけど。
「そういうお前も、もう無理してねぇだろうな？」
「はい。相変わらず忙しいですけど今はもう全力で止めてくれる友達が目を光らせてますからね。早々無理は出来なくなっちゃいました」
「当たり前だ。前の事件の時も相当無理やらかしてたろ？どうしても通すべき意地ってのはあると思うが命張るのは俺たちの仕事だ、お前らみたいなのが今管理局には必要だからな死なれたら困る。俺に見付かる前に俺を呼べ分かったか？」
「……　ほんとマークさんって時々狡いですよね」
「なんか言ったか？」
「いや別に何でもないでーす！」
　最近の若いのはどうしてこうも無理をしたがるのだろうか。おっさん目が離せないよ。
「それでフェイトの事何だが……」
「あぁ……　それなんですけどもう大分噂になってましたね」
「うぇ!?それ、俺知らなかったんだけど……　そういややたらと目線を感じたような」
「多分それですね。良かったじゃないですかフェイトちゃんみたいな可愛い子とカップルになれて」

だからニヤニヤすんじゃねぇよ！

どうやら既に遅かったらしく噂になっていたらしい。

「いや男としては嬉しいが分かるだろ？俺の上司が黙ってねぇよ……」

「あぁ……　ご愁傷さまです」

「なぁ、なのはって俺の上司と仲良かったよな？何とかならんか？」

「私にどうしろと？もういっその事付き合ってますって紹介したらどうですか？」

「俺が死ぬだろ！いい加減にしろ！タダでさえフェイトやお前ら可愛くて気後れしてんのに……」

こちとら独身で女性との交流なんて職場だけだってのにそれが若くて飛び切りの美人となれば気後れもする。

「本当に狡い人……」

「なぁ俺はどうしたらいいと思う？」

「知りませんよっ！全部マークさんの自業自得ですっ！ほんと乙女心を全然分かってないんだから」

突然顔を真っ赤にしてそういうなのは。突然そんなに怒らなくていいじゃないか。

結局この後機嫌を悪くしたなのはと晩御飯を食べに行ってまで色々話たが何も解決しなかった。

因みに1日休みに付き合う事で許してもらった。貴重な休みが失われた瞬間だった。

上司と会ってみた

「はい、こっちの書類終わりましたよー」
「え、マジで？早くない？」
「そない事言うなら確認して下さいよ、ちゃーんと終わってますから」
「うわ……　マジだ。お前びっくりするぐらい優秀なのな」
「ふふん♪これぐらい出来ないと部隊なんて運用なんて出来へんからな」
　ええ……　俺の今日の仕事終わったじゃん。しゅごい。
　貴方が神だったか。
　ない胸を張る彼女は八神はやて。色々あって俺の仕事を手伝って貰っている。彼女もフェイトやなのはと同じ管理外世界出身らしい。
　管理外世界って化け物しかいないのか？
　彼女はフェイト達と同じ年であるが闇の書事件の当事者でもあり被害者で、その魔導師ランクは脅威のＳＳ。

なんなら1人で国ひっくり返せますよっていう魔法を使えちゃうランクだ。この若さで仕事も出来るとか化け物かな？

そして言わずもがな俺よりも立場が上だったりする。

なら何故立場が上である彼女が俺なんかの仕事を手伝っているのか。

「でも安心したわ。そんな期待の出世頭も苦手な事があってさ」

「うん、それに関しては痛い目見てますから。だから学ばないとあかん事は多いと思ってます」

最近あった例の事件、ＪＳ事件で彼女は部隊の司令だった。だが彼女の部隊指揮はお世辞にも優れたものでは無かった。

フェイトやなのは、現場に居た隊員が優秀だったからこそ切り抜けられた場面もあったという。

確かに現場の人間が考えて動けるにこした事はないが、それではダメだ。

司令官の指示1つで現場の人間の命を左右する事になる。だというのに司令が無能では話にならない。

彼女はそんな失敗から学ぶ為にここに来た。

現場の仕事が多い執務官である俺の補佐をする事でそれを学びたいと上司を通してお願い、もとい強制した。

俺を推薦してくれたのは有難い話ではあるが些か荷が重い限りで上手くやれていると信じたい。
「もしかして自分の指揮如きが参考にー、とか思ってますぅ？」
「お、おう。よく分かったな」
「聞いてましたけど、マークさんって本当に自信なさそうですよね。こんな小娘から言われても困るかもですけど、めっちゃ優秀やと思いますよ」
いや魔法１つで都市１つ滅ぼせるやつに言われても困るんだが。
それに周りに才能の塊ばっかいるもんだから自信なんて持てるはずないだろうが。
「確かに自分が前に出る時はただの優秀って感じですけどね。でも後ろで指示だしてる時のマークさん、特にフルバックに入った時はそれこそ国ひっくり返せますよ？」
「おいおい、大袈裟だろ」
「いやほんまに勉強なりますよ。余りにも自分がどれだけ考えなしやったか思い知らされました。マークさん、ぶっちゃけ今日だって指揮してる１０数名の隊員、そして敵戦力の動き全部予想通りやったでしょ？」
「あ、あぁ……　でもたかが数部隊の動きを見切るなんて簡単だろ？パターンなんてせいぜい８９パターンぐらいしかないぞ？自分やお前加えても２９７パターン程度だな」

「だーかーらぁ、それがおかしいって言ってるんですぅー。ほんまどっちがバケモンなんや……」

確かにこの手のシミュレーションは得意だが、俺ぐらいに出来る人普通にいると思うんだけどな。

ずっと前にジャスさん？忘れたけどシミュレーションで割と接戦ばかりだったし、俺別に無双とかしたことないしなぁ。

最近はジャスさんから連絡ないけど、今どうしてんだろ？

そんなことをボーッと思っていると、直ぐに下に膨れっ面で俺を見上げる彼女が。

びっ、びっくりした……　可愛い顔が近くにいきなり出てくると心臓に悪いや。

「むぅ、その顔は信じてないですね？」

「だってなぁ……　現にお前やフェイト、なのはとかが居るし士官学校でも俺は別に余裕で1番だったわけじゃない」

「士官学校での話は凄い気になるんやけど……」

「な、なんだよ」

そのジト目なんだよ。なのはとかも良くそうやって上目遣いで睨んでくるんだが流行ってるのか？

コイツら自分の顔でそれやったらどれだけ威力があるのか分かってるのか、安易にや

ると死人が出るぞ！
「あの事件の時、あんな規模での事件だったにも関わらず死亡者は無し。はて、誰が陸で指揮とってたんやろうなぁ」
「……　いや俺じゃないよ？」
「「あの人が居るから大丈夫っ！」そんな事言ってなのはちゃんもフェイトちゃんも無茶して大変やったんやから。そない長く見てきた訳やないけど、こりゃ２人も堕ちるわなぁ……」
「なんだって？」
「なんでもないですっ！あ、後私の事いい加減にはやてって呼んでくださいね。フェイトちゃん達の事は名前呼びやのにちょっとそれは寂しいなぁ」
「うっ……　分かったよ。はやて」
「やたーっ！やっと呼んでくれましたねっ！いやぁ長かったわぁ、ほなはよ昼ご飯食べに行きましょ！」
「ちょ、おま、当たって……」
「ふふっ♪当ててるんですよ」
　俺の腕を取って抱き着くように引っ張るはやて。気恥しくてずっと避けてた名前呼びがそんなに嬉しかったんだろうか。

確かにフェイトやなのはは普通に名前呼びだったもんな、仲間外れは良くないか。
いや俺の周りにはこうも距離感バグってる奴ばっかりなんだ？
男としては役得なばかりだがフェイト達と比べて何だか物足りな……
「マークさん？今何考えたか当ててみましょか？」
「ははは……　いやほんと勘弁して下さい」
「よよよ、私傷付きました。罰としてこのまま食堂までいきましょうか」
「うぇ!?」
俺はそのまま腕に彼女をドッキングしたまま管理局内を歩き回る事になり、突き刺さる視線をその身で受ける事になった。
余談だが後日、何処からか話を聞き付けてきたヴォルケンのちびっ子に追っかけ回される事になるのだが今の俺が知る由もない。

「なぁマーク。僕の妹と付き合ってるって噂が管理局に流れてるんだが……　これって本当か？」
「いえっ！全くのデマですね、そもそもフェイトと俺が釣り合うと思ってるんですか？

１０も離れてますし俺からすれば高嶺の花過ぎますって」
「あぁ、そうだったのか。同時になのはやはやてとも親密……　いや親密過ぎるって聞いていたからね。僕が手を加える必要がなくて本当に良かったよ。優秀な局員を失わなくて本当に良かった」
　え、俺これ受け答えミスってたらＴｈｅＥＮＤだったの？
　あぶねぇ……　てか俺の上司ずっとニコニコで逆に威圧感ハンパないんだけど。非常に前衛的な笑顔でありますね。
　てかなのは達との噂流れてるのか、皆見る目がないな。なのはとかはやてとかって俺の事おちょくって楽しんでるだけだろ。
　この前はやてには酔った勢いだとは思うが童貞だって知られて煽られるし、なのはには背中に抱き着かれた時にドギマギしてたらくっそ煽られたし……　おっさん泣きそう。
　俺の上司、クロノ　ハラオウン提督。なんと２５歳で俺より若い。凹む。
　しかもめっちゃ優秀で既婚者、もう俺の勝てる所が一つもない。イケメンで既婚者で仕事出来るとか俺に対しての嫌味かな？
　何なら裏方なのに俺より強い、戦えば数分も持たないだろう。
　だってあのなのはだって「クロノくんの得意なレンジで戦うのはかなりキツイ」って

言ってたし。でも勝てないって言わない辺り恐ろしいとは思うが。
先程まで重苦しい威圧感がある雰囲気から一転、世間話をするかのように軽い感じで。
「ところでマーク」
「は、はい」
「フェイト、なのは、はやて。君は誰が本命なんだ？それとも他の子か？」
「……　は？いやいやっ!?本命とか、そんな俺なんかじゃ彼女達とは釣り合い取れてませんって。こんか冴えないおっさんと噂されるのだって彼女達からしたら遺憾でしょうよ」
「なるほど……　これは彼女達も報われないな」
「いやクロノさん。急にどうしたんですか？こんな話をして」
「恋バナってやつだ。それに君もそろそろ上からお見合いの話が沢山下りてきて嫌気が差してるんじゃないか？」
「まぁ……　確かにそうですけど」
実際うんざりはしていた。
管理局は女性には配慮するくせに男には配慮とか考えてないのかそれはもうびっくりするぐらいのお見合い話という名の仕事が舞い込んでくる。

新人だとかには来ない仕事ではあるが、一度でも昇進をすると徐々に多くなっていき俺みたいに歳だけ重ねた男にはアホみたいな数が負債のように溜まっていくのだ。
「なら話を受けてみようとは思わなかったのか？」
「そうですね。不思議とそうは思わないんですよ。将来の話をすると分からないですが、誰かと居る自分って想像が出来なくて。今はもっぱら仕事が恋人ですね」
「それはそうだろうさ。僕もそうだったよ。仕事の事ばっかりで考えもしていなかった、でも今の妻はそんか僕の事をずっと見ていてくれて仕事の事しか考えてなかった僕に違う可能性を見せてくれたんだ」
「はあ……」
「今はピンと来ないかも知れない。だが以外とこういうのは気が付いたら最後既に外堀が埋められた後だったりするぞ、マーク君には何となく僕と同じようなものを感じるからな」
ぶるりと震えて少し遠い目をするクロノさん。
ちょっと聞くのが怖いな、クロノさんでもそんな顔するんだな。
「まぁ僕もそろそろ君へのそういった話を止めるのにも限度があるって話さ。だから此処で本命が居るって言うなら話が違って来るんだが？」
「うぇ!? いや実際アイツらは妹みたいな感じですし……　というよりも彼女達も俺の

事を男だと思ってないでしょ？距離感バグってますし平然と胸とか押し付けてくるんですよっ！」
「お前っ！僕の妹が痴女だと言いたいのかっ！」
「いや一言も言ってないですよ！」
まぁバリアジャケットの話を始めるとそう思われても仕方がないかも知れないが。
でも本当に気安く抱き着いたり、引っ付くのは止めて頂きたい所ではある。いつもドギマギして心臓に悪いのだ。
「とにかくっ！周りからも色々言われても鬱陶しいかも知れないが、お見合いの話が結構行くと思う。もう止めらない強制参加のお見合いもあるだろう。だからもし決まった人がいるならさっさと告白してしまえ」
「まぁ居ないんで仕事だって割り切って行きますよ。相手方には悪いですけど」
「お前っ！僕の妹が取るに足らないというのかっ!?」
いやこのシスコンマジで面倒臭いな！